

「大人にさせるということ」

明星学園 宮下 智

時々、人権のことと絡んで、「メンバーさん方をちゃん付けやニックネームで呼ぶのは止めましょう」なんていう議論が、真剣になされることがあります。ことは人権のことであるから、真剣に語られることは良いことに違いはないのですが、「ちゃん付けの方が親しみがこもる」とか「ニックネームは親しい証拠である」なんていう意見が堂々と語られ始めた時には、その職員中心の発想にうんざりしてしまいます。

そんなことは、ちょっと考えればわかることなのですが、呼び方の最終的な判断は、呼ばれる方にとって、どのような呼ばれ方をされることが嬉しいのか（今の自分を認めているような呼び方になっているか）ということにあるわけで、呼ぶ側の職員に判断する権利はなにもないからです。「親しみを込めて」なんて言っているのは、職員サイド側であって、当の本人は、どんな呼び方をされたいかなんて相談されてないことがほとんどであろうし、たとえ相談されたにしろ、強者の立場にある職員と弱者の立場にある本人との相談関係では、弱者は「イヤ」をなかなか伝えることができないわけですから、本当に呼ばれたい呼び方を見つけ出すことは難しいことであると職員サイドは自覚しながら相談結果を受け入れなければなりません。

では、「ちゃん付け」の不当の根拠をどこに求めたら良いのかと言えば、なぜ「ちゃん付け」したいのか、なぜ「ちゃん付け」になってしまうのかという呼ぶ側の意識（無意識？）に踏み込むことです。

先に答えを言ってしまうと、呼ぶ側が呼ばれる側を「いつまでも子ども（扱い）にしておきたい」気持ちがあるときに、「ちゃん付け」をするのです。「ちゃん付け」をして呼ぶたびに、心の中で「あなたは、まだ一人前の大人ではありませんよ、半人前の子どもなんですよ」と再確認しているというわけです。

* * * * *

ここにこんな例があります。

あるご家庭の話です。年頃の女の子がいるご家庭で、父親が、風呂上がりに裸のままリビングをへっちゃんらでウロウロしている。それについて、年頃の娘も母親もはしゃぎこそすれ、何も批判しない。そしてその状況を父親は、我が家は明るくて隠し事がない家庭で、いつまでもこの状況が続くことが望ましいと考え、自慢する気持ちさえ持っていることがあります。

またそれとは逆に、その年頃の娘が、パンツ一つで父親の前を通り過ぎたりするときに、父親は何も言わず、同じように父親と娘がいつまでも（思春期になった今でさえも）仲が良いと考えたりしている場合があります。そんなとき、このご家庭に起こっていることは、子どもの自立とは全く反対のことが生じているわけです。いつまでも我が娘を子どもにしておきたい（大人にさせたくない）父親と、いつまでも子どものままだにいたい（大人になりたくない）娘とが、ともに依存しながら自立の扉の前で踏みとどまっている姿です。通常の育児では、父親と娘の関係は決してこうはなりません。おそらく、遅くとも小学生の高学年頃には、あれほど楽しみにしていた父親と一緒に風呂を卒業し、次第に口数が少なくなって、異性としての父親との距離は次第に離れていくはずですが、自分のパンツと父親のパンツを一緒に洗って欲しくないとか、そこまで父親を異性として毛嫌いする場合だってあります。偶然であっても、娘が使っているときに、お風呂やお便所の扉を開けてしまったりしたものなら、父親の対する娘の怒りは相当のものでしょう。しかし、それが当たり前の自立の姿なのです。

娘を「大人にしたい」のなら、父親は、風呂上がりであっても、意識的に裸を次第に見せない方向で、娘の前に立ち現われなくてはなりません。娘がパンツ一つで通り過ぎようとするなら、父親は見てはいけぬものを見たような顔つきで、その姿を戒めなくてはならないのです。

仲の良い、親しみがこもっていると思っている関係が、実は「子どものままでいさせたい」あるいは「子どものままでいたい」気持ちの現れであることがわかって頂けましたでしょうか？

* * * * *

重度の知的障がいのお子さんがいらっしゃるあるお母さんが、こんな話をしてくれたことがあります。

「〇〇には、いつまでも赤ちゃんでいて欲しいよう。だっていろいろなことがわかったら、困っちゃう」と。

このお母さんの言動を決して責めるつもりはありません。それは、お母さんの言っていることは正しいからです。〇〇さんが、成長し、精神的に大人になって、もし「僕はどうして障がい者として生まれたんだろう？」とか「僕に障がいがあると分かった時にお母さんはどう思ったの？」とか「僕の障がいは治るの？」とか「僕は、何か役に立っているの？」とかを考え始め、それを聞いてみたいといったときに、その答えを用意することは、答える側としては、本当に困ってしまうことだからです。

しかし、この時私はこんなふうにお母さんに返事を返しました。

「〇〇さんよりも早くお母さんは亡くなりますよね。だって親の方が二十歳以上も年上なんですから。お母さんが亡くなった時に、まだ〇〇さんは赤ちゃんでいて良いんですか？親が亡くなって一人で生きていかななくてはならなくなった時に、まだ赤ちゃんでいるのは、あまりにも不幸です。お母さんは、〇〇さんにいつまでも赤ちゃんでいたいと思うかもしれないけれど、私は、どんどん頭が良くなって、いろいろなことがわかる〇〇さんになってほしいなと思うのですが…。どうしましょう？」と。

〇〇さんと母親との関係は、それから二十年以上の月日が流れた今、とても心温まる心と心の交流が支配する空間を醸し出しています。

「〇〇に会いに来ると、本当にお母さんは生きるエネルギーをもらうよ。元気が出る。〇〇から元気をもらいたくて、会いに来るんだよ。」息子の〇〇さんもそんな母親の気持ちに応えます。もちろん一言もしゃべることができない〇〇さんですが、以前はあれほど握ることができなかった母親の手を長時間握っています。母親の役に立っている自分を確認しているかのようです。ここに一人前の大人として現れ出ている〇〇さんがいます。母親も〇〇さんを一人前の大人として扱い、〇〇さんも母親の前で一人の大人として振る舞っているのです。

この二十年の間、〇〇さんのお母さんの口癖は、「〇〇の決めたことだから、〇〇の好きなようにしたらいいよ。だけど、先生たちに迷惑をかけたらいかんよ」というものです。髪の毛を伸ばしたいといった時も、髭を伸ばしたいといった時も、靴下が嫌いだといった時も、白いご飯は食べたくないといった時も、仕事をしたくないといった時も、その自己決定をやさしく見守ってくれたのです。帰省したくないといった時も、お父さんのことが嫌いだといった時も、弟さんのドライブの誘いを断った時にも、その自己決定を見守ってくれたのです。そして、今があります。もちろん、彼の自己決定で職員に迷惑がかかったことは一つもありません。

「大人にさせる」には、こちらが「大人扱いをすること」が必要なのです。「子ども扱い」をすれば、いつまでもその方は「子ども」のまま終わってしまいます。そして、「大人扱いをする」ことは、相談の対象として一人前に扱うということです。相談をする前提としては、十分な情報提供が必須です。情報がないところでは、適切な答えを導き出す相談が不可能だからです。

実は、良くあることなのですが、ご家族の病気や入院を、心配させるので決して子どもには言わないで欲しいとお願いされることがあります。状況は、まさにケースバイケースで、全部包み欠かさず話すことが、いつでも100%正解とは言えませんが、話す前まで何ヶ月も続いていた課題行動が、例えば不眠や他害、弄便や自傷が、真剣にちゃんと伝えただけで、その日から激減したというような現実を何回も見てくると、正確な情報提供があり、それについてしっかり悩む、ちゃんと心配するという姿こそが彼を成長させ、大人にさせていくんだと考えざるを得ません。彼らの一人前を信じることしかないのです。

WELCOME TO SATORU WORLD

障害者支援施設明星学園における心のケア

<http://homepage3.nifty.com/myojo-satoru/>